

Title	心病む青少年の現状を理解する：キリスト教教育者は何ができるか
Author(s)	平山, 正実
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume18, 2003.2：65-88
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3212
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

心病む青少年の現状を理解する

——キリスト教教育者は何ができるか——

平山正実

一 はじめに

最近、中高校生の不登校者数の急増が指摘されている。そして、一九九一年頃から、一四歳から一九歳までの男子の殺人犯罪が増加傾向にある。また、この頃から、一四歳から一九歳の女子による傷害と暴行事件が著しく増加し、攻撃的傾向をもつ少女ら（殺人にまで至らない）が増えはじめているという。このような、現代の青少年の「引きこもり」や「キレる」背景を分析し、キリスト教教育者が、かれらに何が出来るのか、その方法や対策について探っていききたい。

心病む青少年の現状を理解するにあたって、最初に是非指摘しておきたいことがある。これまでの大人の常識によれば、怠学をしたり、家でブラブラしていたり、傷害や暴行、殺人などを行う若者は、学校社会の落ちこぼれであり、不適応者とみなされてきた。かれらは、落伍者というレッテルを貼られた。

そして、そのような落ちこぼれの若者を産み出した家族も、貧しかったり、欠損家庭が多いとされてきた。しか

し、最近増加している「引きこもり」や「キレる」若者たちの背景を探っていくと、かならずしも、これまでのこうした常識にあてはまらないケースが増えている。かれらの多くは、成績もよく、前科歴のない普通の若者である。かれらは、なんの前触れもなく、ある日、引きこもってしまったり、突然キレることが多い。そのために周囲の者は青天の霹靂のごとく驚かされるのである。一体、かれらの心の中で、何が起っているのだろうか。これまで、日本の家庭教育や学校教育の中で大切に育てられてきた青少年が、突如、無気力になったり、キレたり自殺するとするならば、それまで、「よい子」「普通の子」「模範青年」「優等生」であつたということは何だつたのだろうか。われわれ大人が行つてきた学校や家庭の教育は、適正であつたのか。二〇〇〇年に連続して事件を起こしたいわゆる「一七歳の青年」の親達の職業を調べてみると、一流会社の社員であつたり、教師や保健婦など、表面的にはしっかりとした仕事をもっている人が少なくない。そのように考えると、これらの事件は、決して他人事ではないように思われてくる。

二 「透明な存在」である自分

「ボクがわざわざ世間の注目を集めたのは、今までもそしてこれからも透明な存在であり続けるボクをせめて、あなたの空想の中だけでも、実存の人間として認めて頂きたい」。このような手記を書いたのは、他でもない、一九九七年、神戸市須磨区で起きた小児児童殺害事件の犯人であつた中学生のことばである（一九九七年六月三〇日朝日新聞朝刊）。また、私のところに相談に來たあるリスト・カット（手首自傷）を行つた少女は「リスト・カットすると痛みが走り、血が吹き出る。その瞬間だけ、自分はこの世界に存在しているように思う」と述べた。彼女

は、リスト・カットする苦しみや痛みを通してはじめて、自己の存在感を確認したと言っている。さらに、覚醒剤や援助交際をした少女はこうも言っている。「私は、寂しい。支えて欲しい。いつも不安定だ。シャブは淋しさをまぎらわす逃げ場所にすぎない。私を求めてくれるお客さんとのふれ合いは、一時的に私の変身願望を満たしてくれ、淋しい感情をマヒさせることができる」と。つまり、彼女は、仮想の「出会い」による衝動的な性的快楽のなかで、一時的に己の実存的空虚さを代償し、変身願望を成就させ、そのような仮想現実の中で自分の存在感を確かめているといつてよいであろう。また、ある一流大学に合格した学生は、私にこう言った。「この大学の中で一番偏差値の高い学部に入ったのは、大学の名前や入学した学部がブランドでかつこよく、みんなから評価されたかつからだ。つまり、自分は、周囲に自分の存在を認めさせるためにこの学部に入ったのだ」と。しかしこの学生は、自分がなんの目的で大学に入ったかと問われると答えられなかった。かれは、ただ、自分の存在を確認しアッピールするために入学している。ちなみに、この学生は、入学後急に学習意欲を失い、あまり大学に出てこなくなつた。

これまで挙げてきた若者たちは、自分の存在を確認するために、犯罪や自傷行為や受験を行っている。かれらは、自らが「透明な存在」であることを、意識するとしなやかにかかわらず直感的に見抜いており、かれらなりに、いろいろな方法で、自らの存在を確認しようとしているのだと思う。しかし、自分の精神が不安定であり、自らが透明な存在、無に等しい存在、ことを代えて言えば、「精神が無い」存在であるならば、当然、生きる意味や目的をもって生きることができない。こうした存在基礎の喪失感の居場所を失わせ、いいようもない不安感や寂寥感、実存的空虚感を増幅させることになる。

三 存在の精神病理

(一) 自己の存在確認を求める若者たち

現代の心病む若者たちは、深層意識の中で、自らを「透明な存在」と感じているということをすでに指摘した。人間が心病み、「自分がなくなつた」「自分は透明な存在」であると思ふとき、前章でも述べたように、その人は、己れの存在をなんらかの方法で、確認せざるをえなくなる。たとえ、その確認の方法が、否定的、病的な方法であつたとしてもである。その人の存在の基盤が、崩壊し、分裂し、喪失し、透明化し、無化するとき、その存在の実存的空虚さゆゑに、その人は真の意味での危機に襲われる。人間の存在基盤が、根本から崩れるとき、人は深い絶望感に打ちひしがれる。そしてこのように人生に絶望した人は、生きる意味も目的も価値ももつことはできない。何をやつても無駄と思われる。そして、自暴自棄になり、何をやつてもよいと思うようになる。そして、かれらは最終的には生まれない方が良かったと訴え、死を願う。夏目漱石は、「行人」の中で「死ぬか氣が違うか、それであれば宗教に入るか。僕の前途にはこの三つしかない」と書いているが、存在の基盤を失つた人は、この三つの方法でしか、自分の生の課題を解決することができないと漱石は主張したかつたのだらう。存在の基盤を浸蝕され引き裂かれ、崩壊の危機に陥り、自己が「透明になつてしまつた」ことに氣づいた若者たちは、なんとか、自己の存在を取り戻そうとして、あがき、苦しんでいるのではないか。「人を殺してなぜ悪いのか」といつた少年がいたが、その少年にとつて、「人を殺す」という行為すら、自己確認の手段として、正当化されるという心理機制が働いたのではなからうか。

(二) スピリチュアルな要因が関与する心病む若者たち

さて、ここで、もう一度、われわれは若者の「存在の精神病理」について構造化し、その本質を整理してみたいと思う。

人間は、心身共に健康なとき、自己は、生きていると感ずる。ところが、生物的（遺伝的）要因や環境要因、心理的・社会的要因やスピリチュアル（霊的）な要因によって、その存在が脅かされると、生ける存在としての命は、危機的状況に陥る。しかも、上に挙げたさまざまな要因は各々独立したのではなく、相互に密接な関連性をもっている。これまでの精神医学は、生物学的、遺伝的要因によるものを内因、心理的・社会的要因によるものを外因に分け、両者の相互関連性の中で病気は発症すると考えた。しかし、病気とは何かという定義をめぐっては、色々な論議がある。確かに精神疾患の場合、アメリカ精神医学会はDSM-IVにおいて一定の診断基準を設け、世界保健機構（WHO）は、ICD-10という診断基準を設けてはいる。しかし、実際の臨床の場に身をおくと、どこからが正常で、どこからが病気かという判別は、大変難しい。ドイツの有名な精神医学者であるクレッチマーは「性格異常はいつの時代にも存在する。しかし、静かな時代には、われわれがかれらを鑑定し、熱い時代にはかれらがわれわれを鑑定する」と述べた。たしかに、狂気が吹き荒れる異常な時代には「異常者」がひとびとの上に君臨、支配し、真の意味での「正常者」が獄舎に繋がれることがある。このような事実を踏まえたとき、精神病や狂気というものを考える際には、ただ単に生物学的要因や心理的・社会的な環境要因だけでは不十分で、価値や目的・意味などが問題になるスピリチュアルな要因を無視してはならないことが明らかにになる。しばらく前に問題になった、幼女殺人事件の宮崎勤や西鉄バスジャック事件を引き起こした少年などの場合、精神鑑定を行った精神科医によって、診断名や正常か異常かの判断が異なっていたことは記憶に新しい。このように、診断がまちまちであるこ

とは、治療方針をたてるとき、色々と困難が生ずることになる。また、精神病の場合、かならずしも、生物学的・心理的・社会的要因によって、その病気が発症するものではないことを示唆しているといえる。つまり、スピリチュアルな要因が関与している可能性がある。もちろん、これらの諸要因が、病氣の原因であるのか、それとも、病氣の結果であるのかという問題はさらに詳しく検討する余地がある。

(三) 若者の精神の病理

― 防衛と退行という視点から ―

以上の点を踏まえた上で、若者の精神の病理について、まず心理的側面から考えてみたい。

若者の精神の病理を心理的側面から考える場合、防衛と退行というキーワードを呈示したい(図1参照)。

若者の場合、存在基盤の解体度が比較的軽い場合、その存在の崩壊を防ぐ手段として、防衛という形式

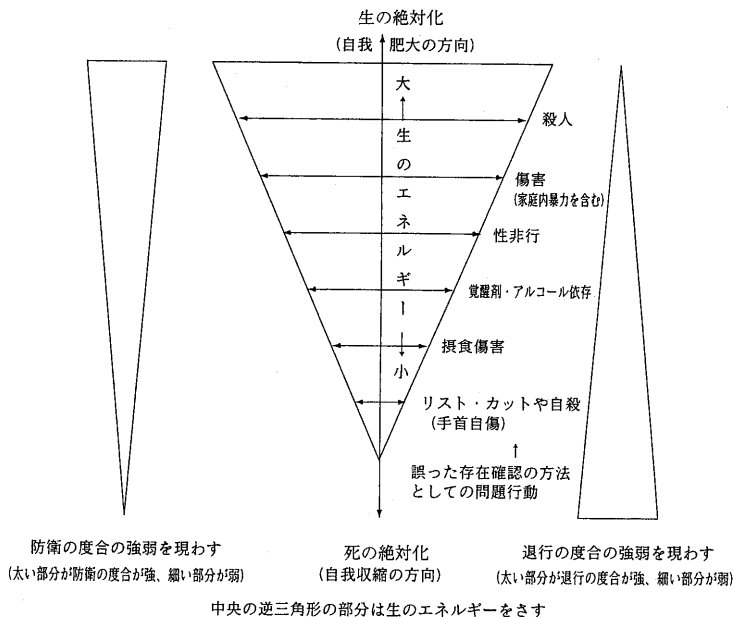


図1 若者の存在基盤の精神病理

をとる。その際、自我は肥大し、顕示的、誇大的な言動、振舞が目立つようになる。つまり、自己の生を絶対視する傾向が認められる。この場合、権力志向、上昇志向的姿勢を取るようになる。そして、自己を絶対視し、家庭内で暴力を振るったり支配欲、権力欲が強く、その欲望が高まり野獣化した権力の「亡者」になったりして、他者を攻撃したり、傷つけたりするなど、犯罪行為におよび他者を死に至らしめることがある。

このように、上昇志向的・顕示的・権威的姿勢の背後には、脆弱な自己存在を防衛しようとする心理機制が働いていると言えよう。

若者が存在の崩壊を防ぐ手段としての防衛という形式をとる場合、具体的には、どのような精神の病理を呈するのであろうか。

たとえば、成績も良く、模範生といわれる青少年、前科歴もない普通の若者がなぜ突然キレルのか。実は、かれらは、良い子のように振舞い、それを誇示することによって、自らの弱い存在自体を防衛しようとしているのである。歴史に登場した多くの専制的な政治家、独裁者らは、その発達過程において、傷つき体験をもっており、その傷ついた存在を防衛するために、顕示的、専制的、威圧的な行動をとる場合が少なくない。そうした彼らの深層意識の背後には、他者への攻撃性や競争意識が隠されていることが多い。他方、若者の存在基盤の解体度が重い場合、図1に示すように、退行の度合が増大し、より強く深く死へと傾斜してゆくことになる。（この点について詳細は、図2及び二ページから一三ページまで参照）

（四）青少年の非行や犯罪の特徴

青年期特有の非行や犯罪について、麦島の指摘によると、最近（二〇〇〇年度）警察庁が発表した報告では、刑

法犯少年の特徴として、次のような点に注意すべきであると述べている。まず第一に、兇悪犯の増加である。兇悪犯とは具体的には強盗や殺人、傷害致死など重い犯罪を犯した者を言う。たとえば、二〇〇〇年に入って、愛知県の高校生が高齢の主婦を殺した事件（五月）、佐賀県の少年が高速バスを乗っ取り、車内の女性を刺し殺した事件（五月）、岡山県の高校野球部員を傷つけ、実母を金属バットで殺した事件（六月）、大分県の高校生が、隣家の六人を殺害した事件（九月）などがここで言う兇悪犯に該当する。第二に、傷害・恐喝など兇悪かつ粗暴な犯罪が増加したことである。第三に覚醒剤を乱用する少年が増加したこと。第四に、いじめや校内暴力に起因した事件が増加したこと。第五に、少年が身体的被害を受ける件数が増加したことである。⁽²⁾

犯罪学者の福島は、一九九七年、神戸で当時一四歳の中学生による連続殺傷事件が起き、それ以来、特異な少年殺人事件が続いた事実を指摘、そのことが、二〇〇〇年に少年法改正につながったとしている。⁽³⁾

ところで、最近現れたこうした青少年の非行や兇悪な殺人について、論じられるとき多くの識者が言及するのは、統計上の量的問題よりも質が問題であるとの指摘である。⁽⁴⁾つまり、近年青少年の犯罪の動機や様態に関して言えば、従来の常識では考えられないケースが多発しているというのである。冒頭でも述べたようにこれまでは、事件の表面に出なかった優しく、大人しい一見真面目にみえる若者が、社会や家庭から引き込まれた後、突然、他害行為に及ぶ事例が少なくない。そして、かれらの心理状態を探っていくと、自分の存在が「ない」「透明である」「パラバラになった」「崩壊した」「傷ついている」などと訴えることが多い。そして、かれらは、自分の存在を確認し、手ごたえを確かめるために、他害行為に及ぶことがある。つまり、かれらは、自分の存在証明、存在確認の手段として、他害行為に及ぶのであるから、他者に対する罪責感⁽⁵⁾は、当然希薄である。「殺しの体験を一度してみたかった」「なぜ殺すことがいけないのか」といった少年がいたが、かれらは、自らの存在をアピールし、その存在を確認

するために、そのように発言し、行動に及んだのであろう。かれらの犯行が弱い自分を防衛し、強さを顕示するた
めであり、さらに他害行為を通して自ら自己を顕示し、存在確認、存在証明をするものである以上、罪悪感が乏し
くて、加害対象は、自分より弱い存在に向けられるのは当然である。事実、こうした青少年が犯す犯行の対象は自
分より弱い母親や社会から脱落した中年男性の浮浪者であつたりする。自分の存在感に対する疑念をもつた若者は、
空虚感や不全感、悲哀感、寂寥感をもっているから、存在がなくなつてしまったこと“に對するあせりや余裕の
なさから防衛的、自己中心的、非社会的になり、衝動的行動に及んだり、依存的行動が顕著になるものと思われる。
また、合理性を持ち、一見、優等生のようにみえる者であつても、オウム教団のエリートがそうであつたようにそ
の内面は、自らの存在感が希薄であり、幼兒的で情緒性や共感性に乏しいことが多い。

かれらのこうした発達過程における未熟性は、そのルーツを探つてゆくと、すべて「存在感の希薄さ」に由来す
ると言えるように思う。

(五) 若者における依存的病理

青少年の自己に對する「存在感の希薄さ」「存在の無さ」「存在の透明性」は、少女の性的逸脱行為の中にも見ら
れる。現代の性非行において中核的位置を占める援助交際をする少女たちの意識の中にも、存在感に對する疑念は、
見え隠れしている。売春をする少女達の生育史を探っていくと、その多くが崩壊家庭の出身であつたり、虐待を受
けた経験をもっている。親が、保護者としての責任を果たしておらず、幼少時より、里親に出されたり、未知の人
に育てられたりしていることが多い。そのために彼女たちは否定されつづけて育てられてきたことが多く、自尊、心
が傷つけられており劣等感や無力感、不全感が強い。早くから、親の温い愛情に接する機会がなく育てられ、競争

と虚栄渦巻く大人社会に放り出された彼女たちは、大人に対する不信感が強く真の意味での「自己肯定感」や「信頼感」をもてず、性を人格と分離し、金銭を得る手段として用いるか、冒頭でも記したように、自らの淋しさ、無力感、不安全感から逃避するため、さらには自らの変身願望を満したり自己確認の手段として、見ず知らずの異性の胸の中で一瞬の安らぎと陶酔の時間を過ごすとする。最近流行し始めた主婦の携帯電話による出会い系サイトによる不倫等の恋愛依存は、家庭不和に起因することが多く、後者のケースであろう。他方、夫の方がかわる援助交際をする少女たちは、一方で異性に依存し、退行し安らごうとするが、他方で異性に対して不信感や嫌悪感、軽蔑する気持、復讐心、操作し支配しようとする気持をもつ。こうした彼女たちのアンビバレント（両面的）な感情は、男性に対する隠された攻撃性を醸成せしめる。このように、援助交際をする少女たちの存在自体が、分裂（スプリット）しているので、そのよって立つ存在の根拠、存在基盤は崩壊の危機に瀕していることが少くない。そして、出会い系サイトで不倫をする主婦や援助交際をする少女たちあるいは癒し系サイトを通して犯罪に巻き込まれる危険を犯して交際を求める若者達は考えようによっては犯罪を犯す少年たちと同じように、自らの存在確認や変身願望のために不倫や、疑似恋愛や売春という性の取引きを異性としていると言えるのである。しかし、そうした確認方法では、彼女の空虚感、淋しさは癒されない。存在の充実感、人格的な関係性の中でしか得ることは出来ないからである。

ところで、近年、覚醒剤依存症に陥る若者が急増しているという⁽²⁾。この現状を、どのようにとらえることができるのだろうか。覚醒剤は、疲労感を取り去り、気分を高揚させ、意欲を増進させるなど精神賦活作用をもつ。なぜ、引き込もっている若者や自己不安全感をもつ青少年の間で、覚醒剤がもてはやされるのであろうか。おそらくこうした若者は、現実に対して欲求不満や葛藤や不安全感、淋しさや絶望感、大人に対する不信感、現実違和感、自己嫌悪

感などをもっているのだろう。つまり、彼らも、己の存在は、ズタズタに引き裂かれ、存在の根拠を失い、その存在自体を脅かされているのではないか。それ故にこそ、かれらは、己の存在を取り戻すために瞬時であつても、自分が自分であることを確認できる覚醒剤を吸引するのであらう。覚醒剤を吸引することによって得られる一時的な陶酔感、気分の高揚感、喜悅の感情にひたることによって、彼らは自らの存在の無化、非存在への怯え、存在基盤の喪失感を防衛し、自らの存在を確認しようとしているのではないか。覚醒剤依存にせよ、アルコール依存にせよ、物質関連障害に陥る人々の精神構造を分析すると、すべて、かれらの深層意識において、存在への揺らぎと、それに伴う不安や恐怖への感情が内在しており、そこから脱出せんがための「救済」の手段として、覚醒剤やアルコールなどが選択されているように思われる。つまり、覚醒剤やアルコールも、かれらにとつて、自己の存在を確認し顯示し存在の崩壊を防衛し、ある場合は退行させる手段となつていのである。かれらは、覚醒剤やアルコールによる瞬間的な陶酔、快楽、気分の高揚、万能感、恍惚感に酔うことによつて、ちょうど買物やギャンブル依存症者のスリルや恋愛依存症者のセックスがそうであるように、己のみじめな存在やそれに伴う存在の消滅感や不全感を乗り越えようとしているかのように思われる。ただし、アルコールと同じように、覚醒剤を多用すると、不眠、食欲減退、易怒性の亢進、焦燥感、不安感等の出現などにより、摂食や睡眠などのリズムが乱れ、幻覚や妄想、錯乱状態に陥ることが稀でない。このように、覚醒剤やアルコールは、精神そのものを破壊する力をもっている。存在を支え、その存在を取り戻す目的で使われた食べ物や恋愛、性やギャンブルや買物、さらにはこうした覚醒剤やアルコールなどの物質は、かえつて、自我の肥大や消滅を促す依存のもたらす病理により、その人の存在を徹底的に破壊してしまうことになる。

(六) 若者における自己破壊の病理

ところで、われわれは冒頭で、リスト・カット(手首自傷)をする少女について記した(二ページ参照)。手首自傷症候群(wrist-cutting syndrome)と診断される少女たちは、若者、とくに若い少女に多く、些細な喪失体験——とくに失恋など人間関係の葛藤を生む事件——を契機として、自分の手首をカミソリで切るといった自傷行為に及ぶ。大抵は裏切られたり失恋したとき、他者に「理解してもらいたい」というアッピルの、顕示的メッセージであることが多い。しかし、彼女たちの存在自体が犯罪を犯す青少年と同じように空虚化ないし無化していることが多く、われわれが冒頭で取り上げた少女のように、その多くが「リスト・カットを行うと痛みが走り、血が吹き出る。その瞬間だけ、自分はこの世界に存在している」と感じると訴える。つまり、彼女たちが、この世に存在していると実感するのは、まさに逆説的であるが、自分の身体を傷つけている時だけなのである。このような心理機制は、リスト・カットする若者だけでなく摂食障害をもつ若者たちの精神の病理を考えるわれわれにとって、重要な問題を提起してくれる。人間は、自己の存在の空虚化から脱出するために自分の心身を傷つけたりむちゃな食生活をしたり、極端な場合、自殺することがある。自分の存在確認、存在証明を行うための他害行為や過食や拒食行為、あるいは自傷行為や自殺行為を行うということ、これが逆説(パラドックス)でなくてはならぬであろうか。

ここで、本章において、これまで言及してきたことをまとめてみよう。

最近の青少年の精神の病理を示す現象として、引きこもりや不登校生の増加、兇悪な事件を引き起こす少年の増加、児童虐待やそれと関連する援助交際を行う少女の増加、出会サイトによる性的不品行、十代の女性の性的感染症や人工妊娠中絶、摂食障害やリスト・カットの増加、覚醒剤吸引率の増加などが指摘されている。

このような犯罪や逸脱行為は従来型のそれとは質が違ってきたといわれている。このような最近の一連の青少年

の行為の特徴を一言でまとめるならば、自他に対する攻撃的エネルギーが直接発散され、規範が守られず抑制力がなくなってきたことであると言えるのではないか。つまり、現代のこういつた問題行動を起す若者達はなんの抑制もなく野獸的な攻撃性や欲望を自由奔放に解放しているように思う。このような事態を別の言葉で言えば、かれらは義務や規範による抑止力をもたず、自己存在の基盤崩壊の危機に直面したとき、己を防衛と退行といった心理機制を用いて、自己再確認すると共にこうした不毛な手段を用いて、自己存在の回復への願望を果そうとしていると説明できるように思う。

四 若者の精神病理とキリスト教

(一) 存在感の希薄さと偶像

前章でわれわれは、現代の心病む若者たちは、存在そのものが崩壊ないし、虚無化、透明化していると指摘した。そして、その存在の虚無化、空虚化を回避するために、顕示的、防衛的あるいは退行的な振舞いをするることによって、その存在を確認しようとしていると述べた。かれらの、そうした内的葛藤は、ある場合は、権力志向的な行動をとったり、家庭内暴力やその他のさまざまな他害行為を伴ったり、性的逸脱行為やギャング、買物、恋愛、食べ物、アルコール、セックス、覚醒剤などに対する依存へと向わせたりする。さらには、リスト・カットのような自傷行為や引きこもり、自殺へと進むこともある。このような若者達の病的心理や精神の病理をキリスト教の立場からどのように考えていけばよいのであろうか。この点をはっきりさせておかないと、かれらにキリスト教教育者としてどうかかわっていったらよいかわからなくなってしまう。これまで再三述べてきたように、心病める青少年

の深層意識構造を特徴づける中核的な概念（キー・コンセプト）は、「非存在」「虚無」「実存的空虚」「空しさ」であり、それを支える防衛と退行の仕掛けである。このような概念をキリスト教神学の枠組の中で考えてみると、それは「偶像」に相当するのではないだろうか。なぜなら偶像が、無きもの、虚無であることは、聖書が再三にわたって指摘しているからである。聖書では、諸国民の神々や人間の作った偶像は無力でむなし（歴代誌上二六・二六、イザヤ書四四・九—一〇）と記している。また、「万物は、唯一の主、イエス・キリストによって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです」（コリントの信徒への手紙Ⅰ八・六）を書いてあり「世の中に偶像の神などなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことをわたしは知っています」（同八・四）とある。

このような背景のもと、聖書では、偶像を絶対化したり礼拝することを禁じている（知恵の書一四章—一六章）。なぜならば、偶像は虚無だからである。偶像とは、神以外の被造物全体を指す。その中には、人間も含まれる。つまり、ユダヤ・キリスト教は、支配者や死者の礼拝（知恵の書一四・五）をしたり、自分自身を神とし絶対化することも偶像礼拝であって（フィリピの信徒への手紙三・一九—自らの腹を神とする生き方）、その行く末は、滅び（死）である、と記している。また、自然（知恵の書二三・一一九）や人間が造り出している物（知恵の書二三・一〇—一九）や制度などを神格化することも、偶像礼拝とみなされる。聖書では、偶像を礼拝することは、倒錯的行動であって、それが虚無であり、非存在であるがゆえに、そこには命がないと言っている。偶像（虚無）に囚われるとき、人は英知を欠き反省しなくなり、悟りや理解力がなく、心はふさがれ、魂は救われない（イザヤ書四四・一八—二〇）とある。

(二) 悪霊と偶像

他方、聖書には悪霊と偶像との関係が再三にわたって記されている（コリントの信徒への手紙Ⅰ一〇・二〇―二二）。しかも、偶像と悪霊とは、共に空虚やそこから生ずる空白の空間、空しさ、しらけ、非存在と密接な関係がある。たとえば、次の聖書の言葉はこの点について多くの示唆をわれわれに与えてくれる。「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない」。そこで、「出て来たわが家に戻ろう」と言う。戻ってみると、「空き家になっており、掃除をして整えられていた。そこで、出かけて行き、自分より悪い他の七つの霊と一緒につれて来て、中に入り込んで住み着く」（マタイによる福音書一二・四三―四五、ルカによる福音書一一・二四―二六）。

汚れた霊（悪霊）が、砂漠の周辺をうろついていて休む場を探していた。ところが、空き家が見つかった。その家は、なんの戸締もなく、悪霊が入ってくるのを歓迎しようとして、きれいに掃除してあったので、悪霊は喜んでその家に入ってきて住みついてしまったというのである。本来、悪霊は異郷の地や墓場、つまり死と親和性があり（マタイによる福音書八・二八―三四）、サタン（マタイによる福音書一二・二四―二七）とサタンの使いである病氣（コリントの信徒への手紙Ⅱ一二・七）、具体的には、精神的異常（ルカによる福音書八・二六―三三）やその他の身体疾患（マタイ八・一四―一五）と深いかかわりがあるとみなされていた。

このように、虚無、空虚、非存在、偶像、砂漠、荒地、異郷の地、悪霊、精神の異常、病氣、死などが、聖書では、相互に密接な関連性をもっていることが示唆されている。

(三) 心病む青少年の問題行動と聖書の人間観

ここで図2をみていただきたい。右側に記したのが、最近注目されている心病む青少年の問題行動である。左側に記したのは、聖書によって示された諸悪である。

聖書では、左側に記したこれらの悪しき欲望や異常な行動を偶像礼拝や悪霊の働きと記している。中央にある透明な存在（虚無）は心病める若者たちの基本的な存在構造と考える。

図2において、左側と右側とを点線で結んだのは、相互に関連性があることを示す。右側の力への意志は左側の野獣化された権力の追求と対応している。殺人や傷害など他害行為は、防衛と関係し憎しみや殺意と関連性をもつ。援助交際など歪んだエロス（性的快楽）への欲望は、不品行や情欲への囚われと関係がある。また、覚醒剤やアルコールなどは防衛と退行と関係し快楽追求への悪しき欲望とかかわり合いが深い。なお、こうした依存の心理は防衛

〔心病める青少年の基本的構造〕

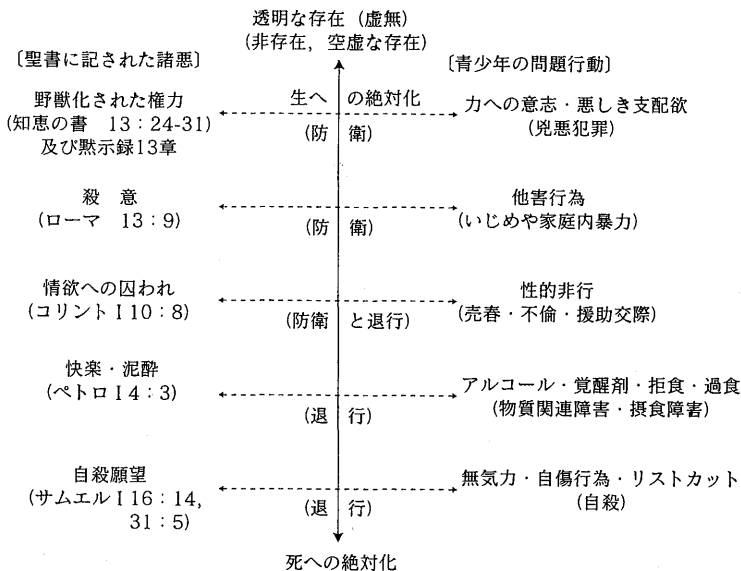


図2 キリスト教倫理と若者の精神病理

と退行の両方を含む。さらに、摂食障害や自傷行為は、退行と関係し命の衰退とその延長線上にある死と関連している。

(四) 生の絶対化と死の絶対化

ところで、われわれは、もう一度人間の虚無、非存在、空しさといった基本的な存在様式を、生と死という対極的な枠組の中で、どう位置づけるかということを考えるために、その基本的布置を構造化してみたい。

図1と図2には、上方に、生の絶対化、下方に死の絶対化という二つの対極的な概念を布置する。

生の絶対化とは、生きている人間や人間が産み出した制度、国家、物、心理規制、自然などを絶対化することを指す。このような生の絶対化方向に思考が向うということは、自我の肥大を意味し、言行面では、人間の有限性をわきまえず、誇大的、顕示的行為へと向うことを意味する。その結果として、人間は権力志向的・權威的・専制支配的になり、他者への攻撃性が亢進する。生の絶対化は、生物学的な比喻を用いれば、がん細胞にたとえることができる。がんの増殖は、死ぬことなく無限に増殖する。つまり生を絶対化する。その結果、人間の生命そのものを亡ぼしてしまう。自我を肥大させ、生を絶対化すれば、自・他ともに、存在そのものが危機に陥る(マタイによる福音書一〇・三九)。つまり、存在は無化され、空虚化ないし虚無化される。このような事態こそが生の偶像化である。

他方、慢性自殺といわれるアルコール依存、覚醒剤依存、さらには恋愛依存、食物への依存(摂食障害―拒食と過食を含む―)、リスト・カットなどに陥る若者はすべて、自罰的心理機制を内在化させており、究極的には、死の絶対化ないし死へと至る志向性をもつていると言えるだろう。このような若者の心理の背後には、前述したよう

に、存在の虚無化、快樂つまり退行を伴う自己と物質（アルコール、覚醒剤）の融合化、売春や不倫、心中に代表されるような自他のエロスの結びつきによる他者支配（防衛）と退行を志向する人間の融合化（異性と一体化）に伴う死の絶対化、つまり、死の偶像化（ボンヘッファー）といった態度が隠されている。そして、そのような態度は自己絶対化と密接なかわりがある。

さらに、現代における若者によくみられる、引き込みや周囲に対する無関心、自発性の喪失、目標の欠如なども、死への方向をもっていると言えよう。

これまで、人間存在の空虚化を媒介として生の絶対化と死の絶対化が生ずる様態について述べてきたが、生の絶対化と死の絶対化とは、全く対極的位置にあるものであろうか。むしろ、生の絶対化と死の絶対化とは、相互に深い関連性があるのではないかと思われる。どこに両者の接点があるかと言えば、「絶対化」という点においてである。前に引用した「自分の命を得ようとする者は、それを失う」という言葉は、「自分の命を得ようとする」という生の絶対化は、「自分の命を失う」という死の絶対化につながることを意味しているのではないか。いずれにしても、人間の存在基盤が空虚化すると、それが生の絶対化であれ死の絶対化であれ、自己の絶対化あるいは自己の確認化へと進み、最終的には、死へと傾斜していくことに注目したい。現代の若者の逸脱行為を分析していて、このような心的メカニズムをおさえておくことは大切だと思う。

（五）生の絶対化と有限性への自覚の欠如

次に、存在の空虚化、非存在性に直面した人間が、生の絶対化と死の絶対化を行う場合、その判断の根拠について考えてみたい。

まずはじめに、生を絶対化するという考え方の背後には、万能感が存在しているということである。そして、万能感に支配されているということは、人間の有限性への自覚を欠いているということに他ならない。人間が神によって、創造された被造物であるということを忘れ、人間が神になるという倒錯が生ずるとき、人間は自らの判断の絶対性を信じるようになる。その結果、その人が悪しき欲望に支配されても、そのことを客観的に洞察したり反省することが出来なくなる。しかし、人間が、精神の内界を洞察し、その有限性を認識するとき、己の生を絶対視することはなくなる。この点について、聖書は、鋭い洞察を示している。「神に僅かに劣るものとして人を造られた」（詩篇八・六）という聖句は、人間が神によって造られた被造物であること。人間が限界ある存在であり神でないことを示している。また、「人生の年月は七十年程のもです（中略）瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛去ります」（詩篇九〇・一〇）といった聖書のことばも、人間の有限性、限界性を示している。人間の判断の限界については、聖書は、次のように述べている。「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」（ローマの信徒への手紙七・一九）。このように、人間は命の長さという点でも有限な存在であり、人間の判断能力にも限界があり、われわれは、神の憐れみによつて生かされているのだという信仰をもたずにいると傲慢になり、万能感に支配され、有限な存在であることを忘れ、自らの生を絶対化するようになる。

（六）死の絶対化と全体的視野の欠如

次に、死を絶対化するという考え方の背後には、全体的視野の欠落という事態が存在していることを指摘しておきたい。自殺しようとしている人の共通特徴として、「視野の狭窄」ということが言われている。目先の部分的事柄に囚われ、全体的な観点からものが見られなくなってしまう。また、一瞬一瞬の事柄に振り回され、過去から現

在、未来に対する展望を持つことが出来ない。そのため、行き詰まってしまい、過度に罪責的になったり、自分の死が将来の自分にとつても、周囲の者にとつても、どのような影響を与えるのかという全体的な視野をもてず、自殺を試みようとする。

他方、「人を殺すのが、何故悪いのか」「一度、人を殺す体験をしたかった」といった考えに支配され他害行為に走る若者は、人間が、空間的には共同体の中で生かされているという全体的な視野を欠いていることを示している。聖書は全体的視野をもつことの重要性を次のように述べている。「イエス・キリストは、きのうも、今日も、また永遠に変わることのない方です」(ヘブル人への手紙一三・八)と。時間的側面で全体的視野を欠くと、人間は、衝動的に殺したい衝動や死にたい衝動や悪い欲望が「今」沸き上ってきたとき、その衝動を支配・コントロールし、一歩引いて「過去」を回想し、「未来」を展望して抑制することが出来なくなる。

コヘレトの言葉に「神は永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない」(三・一一)とある。

つまり、神は人間に「永遠を思う心」すなわち、全体を見通そうとする心を与えられた。しかし、人間は時間的にも空間的にも、完全に全体を見通すことのできない限界のある存在である。まさに「神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されない」のである。これが、聖書の主張である。生の絶対化は、人間が限界ある存在であるという意識の欠落であり、死の絶対化は、人間が全体を見通す視座を欠いていることの結果である。

以上の点を踏まえた上で、われわれは、若者のさまざまな問題行動を理解していかなければならない。

五 心病む若者たちにキリスト教教育者はどう援助するか

(一) 心の「城砦」を構築する

われわれは、現代の若者の精神の病理の基本構造として、かれらが、存在に対する空虚感や非存在への恐れをもっていることを指摘してきた。かれらが、そのような精神の病理を抱えているからこそ、尾崎豊が歌っているように「僕が僕であるために」どうすればよいのか、「正しい自分としてのあり方とは何か」、「本来の自己を確立するためには、どうしたらよいのか」を若者たちは問い続けるのであろう。このような問いに答えていくためには、人格の成熟性や信仰の問題を抜きに論ずることはできない。つまり、このような課題はスピリチュアルな問題なのである。存在の空虚さに苦しむ若者によくみられる特徴として、完全主義、生や死や他者への自己判断に関する絶対化、万能感などが挙げられる。このような構えがあるため、かれらは、対人関係場面や物事の判断において柔軟性を欠きいつのまにか現実から遊離してしまう。そのため、壁にぶつかると現実に向き合うことができなくなり、意識すると否とにかかわらず、防衛したり退行したり依存してしまう。つまり、かれらは、その葛藤状況の中にあつて、その存在の危機を自らの力で乗り越える力を失ってしまう。それゆえにこそ、その存在の基盤を支える人つまり、援助者が必要になるのである。

サンテュエクチュベリが書いた「城砦」という砂漠の中にある城をテーマにした作品がある。かれは、試練の多いこの砂漠のような社会の中で、安全で安らぐことのできる場所——つまり「城砦」——を作る必要があることをこの小説の中で物語っている。

われわれは、先に砂漠をうろついていた悪霊（汚れた霊）が、空き家になっているところに入り込んで住み着いたという聖書のことばを紹介し、空き家であることは好ましくないこと、しかも、家をきちんと管理していないと悪霊に占拠されてしまう危険性があることを指摘した。心病む若者たちが、存在の空虚さと向き合い心の「城砦」を築くためには、その存在を支える神の存在を指し示すことばとそのことばを實踐する援助者が必要である。つまり、かれらの心の中に神のことばによって安心、安全な「城砦」を築き、その城を外敵から守るために神の心を具現化して生きる援助者がいることが大切である。そのような援助者の資質はどのようなものかと問われれば、心病む若者が言いたいことがあればなんでも言える人、かれらを肯定的に受け止めてくれる人、よいところを評価してしてくれる人、傍に居てくれるだけで安心できる人でなければならぬ。存在の空虚さを襲う悪霊の到来を防ぐためには、援助者が心病める若者たちのまさに城砦とならなければならない。

（二）存在基盤を知った若者に「ある」という神を指し示す

最後に、心病める若者に対して、とくにキリスト教教育者がどうかかわるべきかという点について私見を述べこの論文の結びとしたい。最初に聖書のことばを聞こう。

「神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。「わたしはある」という方がわたしをあなたに遣わされたのだ」（出エジプト記三・一四）。神はモーセに向って、「わたしはある」という者だと言われる。キリスト教教育者は、存在の根拠である「ある」という神を心病む若者に内存在させる役割と使命をもっていると言えよう。「なぜなら、万物は唯一の主によって存在し、わたしたちも主によって存在しているからだ」（コリントの信徒への手紙Ⅱ、八・六）。キリスト教教育者は、「存在の基盤」

を失った若者たちに近づき、とりなし、寄り添い、「ある」者（神）を接ぎ木し、根づかせかれらの心の中に神の「城砦」を築くことができるように配慮する必要がある。

「ある」者の存在があるがままに素直に受け入れる者は、新たな生き方を見出すことになるだろう。「ある」者（神）につながった者は、もはや「人を殺すことがどうして悪いのか」「一度人を殺す体験がしてみたかった」などと言うことはなくなるだろう。なぜならば、「ある」者（神）が、殺すなど命じておられるのであり、新しく生まれた者は、その命令を規範という「城砦」によって守られているからである。人の命が尊いという根拠、あるいは人を殺してはいけないという理由は人間にはわからない。ただ、「ある」者（神）を人が受け入れたとき、その人は「ある」者の命令のゆえに、人を殺してはいけないと悟るのである。

画家のゴーギャンは「人間はどこから来てどこに行くのか」というテーマで、人類に名画を残した。だが、神を知らない人は、自分がどこから来て、どこにいくのか、生とは何か、死とは何か、人間は何のために存在するのかといった生きるために重要な根本的課題に答えることはできない。人間はよく考えてみると自分の意志で生まれたのではなく、また、ほとんどの場合、自分の意志で死ぬのでもない。生や死の意味や人間の存在の目的は、創造主である「ある」者を知って始めて、おぼろげではあるが、はじめて明らかになる。日本は先進国であり、第一級の知識や技術を教育する人材やシステムを持っている。しかし、現代に生きる多くの若者は自ら生きることに焦りを感じ、ただ神の愛と憐れみによって生かされていることを知らないのではないか。キリスト教育者の役割と使命は、存在基盤を失った若者たちに、愛の源である「ある」者（神）の存在を指し示し証する存在となることであるように思う。

参考文献

- 石井利文 兇悪犯罪は本当に増えているか―暴力犯罪・少年犯罪の傾向を読む―この科学、九六・二―一〇、二〇〇一
麦島文夫 犯罪の世界から見ると―暴発してしまう若者 教育と医学 四九(2)・四―一一、二〇〇一
福島 章 暴発してしまう若者 教育と医学 四九(2)・二―三、二〇〇一

『キリスト教文化学会年報』No. 47 より転載